

〔資料紹介〕

## 並木栗水『義利合一論辯解』解題並び翻刻

### 一 解題

#### I 並木栗水小伝

並木栗水（名は正留、字は九成、左門と称す、号は栗水、一八二九年七月七日生〜一九一四年七月二十二日歿）は、下総香取郡御所台（現、千葉県多古町）の出身。父の簡齋（名は良貞、号は簡齋、生没年不詳）は女婿であり、この時佐原で医を生業としていた。父の簡齋は栗水を自分と同じ医者にしたかったようであるが、

醫之爲業、雖技巧術精、非事諛腴、則不免貧、均之貧窶也。

兒寧爲儒、簡齋頌焉。

（塚本松之助「栗水並木先生伝並逸事」）

と栗水は医者になることを嫌い儒者になることを決意する。佐原在住の頃、清宮棠陰の知遇を得る。そして栗水二十一歳の

時、棠陰の紹介で江戸に出て大橋訥庵（名は正順、字は周道、順蔵と称す。号は訥庵、一八一六〜一八六二）に師事する。

栗水は、訥庵の思誠塾在塾中に川田甕江（名は剛、字は毅卿、一八三〇〜一八九六）と識り合う。その交流は甕江が死ぬまで続いた。栗水は訥庵不在の時は代講を務め、訥庵歿後に訥庵の学統を引き継ぐ者は栗水であると周囲から見なされていた。またこの時期、師訥庵の命に従い、訥庵の養子大橋陶菴（名は正燾、字は叔載、燾次と称す。一八三七〜一八八二）とともに国事に奔走している。訥庵のもとに居ること七年、安政二年、母の老いを理由に佐原に帰る。思誠塾を去る際の様子を日記に記されている。

三日陰、朝去思誠塾。山口鹿峰・椋木星岳・岡本・中山・高橋・萩原・櫻井諸兄送至于二州橋東。燾次君・川田甕江・太田柳涯送至于八幡驛。薄暮達木下驛乗船。五更歸家。予以嘉永巳酉入思誠塾、于今七年矣。<sup>1)</sup>

岡野 康幸

(並木栗水『安政二乙卯日新録』八月三日条)

佐原に帰った栗水は、安政三年螟蛉塾を開き郷里の子弟の教育にあたる。慶應二年、栗水は故郷の御所台に戻り螟蛉塾を続ける<sup>(2)</sup>。明治元年一月、多古藩主久松勝行の世子、久松勝慈の侍読となる<sup>(3)</sup>。同年十月、新政府は栗水を大学教官に召し出しても、母が病であると称して辞退する<sup>(4)</sup>。栗水の門下からは、文学博士林泰輔・大審院判事寺島直・貴族院議員五十嵐敬止・菅沢重雄、衆議院議員大須賀庸之助など多数存在した。大正三年七月二十二日家にて亡くなる、享年八十六。

栗水の著作は多数存在するがその殆どが写本であり、公刊されたものは『栗水漁唱』二卷(明治二十一年)、『宋学源流質疑』三卷(明治三十六年)栗水の死後、次男讓之助によって刊行された『増補周易私断』六卷(大正六年)が存在する。

注

(1) 並木栗水『安政二乙卯日新録』は(財)無窮会蔵。

(2) 並木栗水の螟蛉塾の動向は、神立春樹「那智左伝師の漢学塾菁菁学舎、そして無逸塾―千葉県域にみる明治期の地方漢学塾・私立諸学校―」(『三島中洲研究』vol.2所収、二松学舎大学21世紀COEプログラム、2007年3月)を

参照。

(3) 多古町史編さん委員会編『多古町史』下巻、四六九頁

(昭和六十年十一月)

(4) 明治初年の大学制度については牧野謙次郎『前記明治時代漢学史』(乙)一「学生発布と漢学」二「学制発布後の漢学界」(早稲田大学漢学会、昭和十二年二月)、『東京帝国大学学術大観 総記・文学部』第一章、東京帝国大学の淵源(一)明治初年の大学校を参照。

(5) 並木栗水の門人については『並木栗水先生頌徳建碑記念録』並木栗水先生事歴大要、八、門人(並木栗水先生建碑事務所、昭和十三年九月)を参照。

参考文献

塚本松之助「並木栗水先生伝並逸事」(房總研究會編『房總郷土研究資料』(昭和九年〜十四年、謄寫版)

内田周平「栗水並木先生碑」(『東洋文化』第百二十九号、昭和十年三月)

『並木栗水先生頌徳建碑記念録』(並木栗水先生建碑事務所、昭和十三年九月)

『名家伝記資料集成』(思文閣出版、昭和五十九年二月)

多古町史編さん委員会編『多古町史』下巻(昭和六十年十一月)

神立春樹「那智左伝師の漢学塾菁菁学舎、そして無逸塾―千葉県域にみる明治期の地方漢学塾・私立諸学校―」(『三島中

洲研究』vol.2所収、二松學舎大学21世紀COEプログラム、2007年3月）

## II 『義利合一論辯解』について

『義利合一論辯解』は明治二十年の執筆。執筆の動機は序に

辨者曰、余頃者東洋學會雜誌ト題セル小冊子ヲ見タリ、其  
中新説奇論モ多キ内ニ、三島氏ノ義理合一論ニ至リ、新奇  
珠ニ甚ダシキヲ覺フ、到底人欲ヲ認メテ天理トスルモノニ  
テ、功利説ヲ主張シ、以テ時好ニ投ツルニ過キサルノ論ナ  
リ、

と述べるように、三島中洲によつて著された「義利合一論」  
（『東洋学会雑誌』所収、明治二十年、一月・二月）に対する反  
論書である。中洲と栗水の主張を簡単に纏めるならば、中洲は  
義と利は本来合一の関係であり、利は義の結果であつて、利の  
伴わない義の存在はあり得ないとする考えである。対して栗水  
は義と利は二つであり、義そのものを目的とする。結果として  
の利は否定しないが、利を宛にして義をおこなうという態度を  
否定する。本編に於ける中洲批判は痛烈窮まりないものであり  
「功利家」「卑陋家」といつて憚らない。

栗水の読んだ『義利合一論』は序にもあるように『東洋学  
会雑誌』掲載のものである。『東洋学会雑誌』掲載の『義利合  
一論』は段落・句読点も無い。しかし栗水は中洲『義利合一

論』を全文引用し、そして全文を二十六段落六十七条に分け逐  
一反論する。だが段落によつては条を分けず、一段落全部批  
判（二十五、二十六段落）する場合もある。栗水『義利合一論  
辯解』が二巻である理由も、中洲『義利合一論』が二回に分け  
（『東洋学会雑誌』二号一月・三号二月）連載されたことによ  
る。

中洲『義利合一論』は『東洋学会雑誌』が初出ではなく再録  
である。初出は『東京学士院雑誌』（第八編第五冊、明治十九  
年十月）になる。猶、再録に際して『東京学士院雑誌』にあつ  
た序文は削除されている。

## III 書誌

本資料は『二松學舎大学附属図書館和書目録』（昭和六十三  
年、二松學舎大学附属図書館、九十頁）に次のように著録され  
ている。

義利合一論辯解 写本 半紙本二卷二冊 筆写者宇井太三  
郎 筆写年明治二十九年 著者 並木正詔 成立 明治  
二十年 備考 三島毅著『義利合一論』の辯解書。東洋学  
会雑誌を読んだの執筆と自序にあり。

書誌事項を記せば書型は高二十四、二×幅十五、一。三つ目綴。  
題箋は無く、一巻一丁表右側に「義理<sup>（りき）</sup>合一論辯解」と記され  
ている。なお、二巻一丁表右側は「義利合一論辯解」と記さ

れている。蔵書印は一卷・二巻ともに一丁表に上から「惇齋文庫」「二松學／舎大学／図書館」「宇井家蔵書記」と各一顆。全七十六丁、毎半丁十行（一行二十三〜二十五字程度）筆写年、一卷二十六丁裏に「明治廿九年丙申十一月廿九日 宇井太三郎」二巻五十丁裏に「明治廿九年丙申十二月十七日成写／宇井太三郎」と記されている。

## 二 翻刻

凡例

一、底本は、二松學舎大学附属図書館蔵、那智左典旧蔵、惇齋文庫に収める『義利合一論辯解』二巻を用いた。

二、三島中洲「義利合一論」の底本は、並木栗水『義利合一論辯解』中に収める本文を用いた。よって「義利合一論」（『東洋学会雑誌』二号・三号、明治二十年一月・二月）『中洲講話』（文華堂出版、明治四十二年十一月）所収の「義利合一論」と文字の異同が多少ある。底本のままでは意味の通らない部分に関して二書を参照した。

三、底本は、並木栗水の門弟たる宇井太三郎による筆写である。

四、底本の文字は、いわゆる旧漢字旧仮名使いが用いられている。しかし、ところどころ旧漢字が現行のいわゆる常用漢字

であったり、仮名使いのおかしいところも見られる。明らかに誤字には（ママ）と振り、仮名使いのおかしなところはそのままにしておいた。猶、電算機入力の場合上常用漢字に改めざるを得なかった箇所もある。

五、重文符号（おどり字）は、「々」、「、」、「」はそのまま用いたが、それ以外は文字に改めた。

六、本文中の「○」は、三島中洲「義利合一論」本文。「●」は、三島中洲「義利合一論」の一節。「▲辨」は、並木栗水の反論を示す。

七、本号は、『義利合一論辯解』二巻中の一巻の翻刻である。

### 義利合一論辯解

並木正韶辨解

辨者曰、余頃者東洋學會雜誌ト題セル小冊子ヲ見タリ、其中新説奇論モ多キ内ニ、三島氏ノ義理合（マヤ）一論ニ至リ、新奇殊ニ甚ダシキヲ覺フ、到底人欲ヲ認メテ天理トスルモノニテ、功利説ヲ主張シ、以テ時好ニ投ツルニ過キササル論ナリ、然レドモ従来異端俗儒ト、聖賢道學ノ眞儒トハ、コノ義利ノ辨ヨリ判ルコトナレハ、黙止シ難キニ因リ、不得已シテ聊此ノ辨ヲ作レリ、我豈好辨哉、

義利合一論

三島 毅 著

夫人間ノ義利ハ即天上ノ理氣ナリ先ツ理氣ヨリ説出サン天ノ蒼々タルハ萬物ヲ生育スルノ一元氣アルノミ此元氣ヲ太極ト云漢書ニ太極元氣函三爲一トアリ又注疏ニ太極謂未分之前元氣混而爲一等ニテ古説知ルベシ宋儒一理ヲ以テ太極ヲ説クハ後世ノ謬説ナリ聖人此一元氣中ニ就テ自然ノ條理ヲ見出シ元亨利貞ト云即王陽明所謂理者氣中ノ條理ナリ而此理ト氣ハ唯一物ニ付指シ處ニテ異ニスルノミ決シテ二物ニハ非ス即陽明所謂理氣合一ナルモノナリ宋儒ハ太極ノ一理ヨリシテ天地萬物ヲ生スルトテ理氣ヲ先後二分チ説ケドモ余ハ取ラス此理然レドモ此理氣論ハ道學者中紛々ノ説アリ一朝一夕ニ辨シ難シ唯大旨ヲ掲ケテ本題ノ根底トナスノミ」

● 夫人間ノ義利ハ、即天上ノ理氣ナリ、▲ 辨 此論甚妙ナリ、果シテ能此説ヲ知ラバ義ト利トノ合一ナラサルヲ知ラン、● 天ノ蒼々タルハ萬物ヲ生育スルノ一元氣アルノミ、此元氣ヲ太極ト云、▲ 辨 此論大謬ナリ漢唐儒者太極ヲ知ラズ、● 宋儒一理ヲ以テ太極ヲ説ク、▲ 辨 宋儒ノ説大ニ善シ、謬説ニアラズ、● 聖人此一元氣中ニ就キ、自然ノ條理ヲ見出シ、元亨利貞ト云、▲ 辨 此論先ツ可ナリ、陽明ノ語謬見ナリ、● 而此理ト氣ハ唯一物ニ付キ、指シ處ニテ名ヲ異ニスルノミ、

決シテ二物ニ非ス、▲ 辨 此論亦大謬、陽明無識ナリ、● 宋儒ハ太極ノ一理ヲヨリシテ、天地萬物ヲ生スルトテ、理氣ヲ先後二分チ説ケドモ、▲ 辨 宋儒出テ、太極陰陽始テ明判、理氣ノ辨始テ瞭然、孔子ノ舊説ニ復シタリ、取ラヌモノハ知ラヌカラナリ、余卒ニ其子細ヲ辨セン、繫辭傳曰、易有太極、是生兩儀トハ何ソヤ、伏儀氏ノ畫シタルニ指シテ言ナリ、ニハ即陰陽ノ象ナリ、陰陽ノ象ヲ圖ニカイト見セタガ伏儀ノ易ナリ、太極ハ無形ノ理ナル故、圖ニカイト見セルコトガナラヌ、已ムヲ得ス陰陽ハカリ易ニカイト見セタ、伏儀之易陰陽以下ト云、ソコテ孔子様ガ俗人カ陰陽ヲ見テ即道ヲト心得ルト、大ナル害ガ出來ルト思召シテ、ソノ卦畫中ニ理ノ含ンテ有ルコトヲ示シ、アノ伏儀ノ畫セシ易ニハ【易ノ字、卦畫ヲ指ス、】先ツ太極ト云理ガ有テ、是レガ【是ノ字、理ヲ指、】陰陽ノ兩儀ニヲ産出シタモノシヤト云、コレ即易有太極、是生兩儀ノ御發明ナリ、孔子様カ已ニ無形ノ理ガ、有象ノ氣ヲ産出シタトノ玉ヒハ、ソレニ相違ハ、御坐有ルマシ、伏儀太極ノ理ヲ御失念遊ハサレタ譯デハナイ、何分圖ニカクコトカナラヌカラ、陰陽以下ナリ、繫辭傳ニ又曰、形而上者謂之道、形而下者謂之器ト、形而上ノ道ハ、即無形ノ太極ナリ、形而下ノ器ハ、即ニ有形ノ陰陽ナリ、箇様ニ御丁寧ノ御發明アリテモ猶未タ俗人ガ分ルマイト思召シテ、子曰書不盡言、言不盡意、然則聖人之意其不可見乎ト御嘆息ナ



リ、漢唐儒者果シテ言ヲ盡シ意ヲ盡スコト能ハス、故ニ太極元氣函三爲一ダノ、元氣混而爲一ダノト、謬言ヲ吐キ出ス、夫レ元氣トハ、氣ノ始テ生シタル所ヲ指スナリ、元ハ首トモ始トモ訓ス、即乾ノ卦三ノ初九ニテ兩儀ノ一ナリ、太極ニ非ス、全ク漢儒ノ見違イナリ、漢儒ノ謬説出ルヨリ、後世俗儒輩是ヲ祖述シ、象山テモ、陽明テモ、吾邦ノ大儒ト呼ハル、仁齋テモ、徂徠テモ、皆其謬ヲ襲フタモノナリ、勿論漢儒ノ謬モ亦祖トスル所アリ、老莊ナトニ元氣ノ説アリ、因テ後世神仙道家者流、皆コノ元氣主張シ、修練ヲ事トスルナリ、後漢明帝紀ニ升靈臺望元氣、註ニ元氣ハ天氣ナリト、元氣ハ眼ニ見ラル、物、故ニ望ムト云、太極ハ無形ノ眞理テ、肉眼テハ、見ルコト叶ハス、故ニ異端俗儒、目ニ見ユル氣ヲ認テ、見ヘヌ理ヲ知ルコト能ハス、謬説アル所以ナリ、サテ宋朝ニ至リ、濂溪周子出テ、大易ヲ發明シ、太極圖説、通書、ノ作アリシヨリ、洛閩諸賢追出シ、易説益明カニナリ、太極ノ理タルコト、兩儀ノ氣タルコトカ、著見明顯ニナリタリ、其太極生兩儀トコロヨリ云ヘハ、先後ノ序アリ、形而上形而下、コレナリ、其兩儀ト成リテヨリ以下ハ、妙合トテ合シ、元ト二ツナレハ、自ラ界限アリテ、混ズ可カラス、サテ天地開闢以來前ハ、誰モ見タ者ガ無イカラ、何程辨シテモ分ルマイガ、先ツ銘々ノ身上ニ體認シテ、太極ト陰陽トヲ能ク考テ見ルヘシ、伏儀モ仰觀臥俯察テ、天地萬物ノ理ヲ御覽アリテ、

而後六十四卦ヲ制作シタトアル、マツ一物一太極トテ、事事物物ニ太極カ付テ居ル、詩經ノ有物有則モノソコトナリ、然レハ人身ノ太極ハ何ゾ、心ナリ、故ニ心爲太極ト云、心ハ無形ノ理ノ居ル處、所謂神明之舍故ニ太極ナリ、分テ云ヘハ、人心ト道心トノ二ツカアル、身體ハ育象ノ氣ノ凝結シタル物、即陰陽ナリ、身體ト心ト合併シテ居レトモ、元ト二ツモノ也、故ニ人死スレハ二者相離レテ、死體ニハ仁義禮智【即天ノ元亨利貞】ノ理カ無クナル、死デモ陰陽ノ氣ノ形骸ハ存シテ居レトモ、惻隱モ、羞惡モ、辭讓モ、是非モ、何處ニカ亡失シテ、空宅ノ如シ、此ヲ知レバ、天ノ太極ト陰陽トノ二ツナルコトモ、分明ニ分ルヘシ、繫辭傳ニ、原始反終、故知死生之説トハ、此之謂也、余毎ニ曰、濂溪先生ハ三代以後ノ聖人ナリト、伏儀ニモカケヌ太極ノ圖ヲカイタ、併シ圖説ヲ讀テ翫味セ子ハ、譯カ分ラヌ、ソコテ朱子丁寧ニ註ヲシタナリ、後ノ學者註ヲ讀テモ譯カ知レヌ、伏儀ニ問ヘト云ヨリ外ハナイ、陽明モ理者氣中之條理、理氣合一ナト、云ハ、理氣ノ辨ヲ知ラヌ故ナリ、却説理ヲ死物ト見ルガ、異端俗儒及西洋ノ窮理説ナリ、理ハ生々ノ根元ニテ、死物ニアラス、故ニ元亨利貞トハ、太極ノ眞理ガ天ニ循環往來スルヲ云、俗人カ活理ナド、云カ、理ハ元ヨリ生々ノモノ、モノ、活ノ字蛇足ナリ、氣ハ腐敗消滅スル物、故活氣ト活ノ字ヲ添テヨシ、サテ此段ガ分レバ、義利合一ノ論モ刃ヲ迎テ了解スヘシ、

○却説人ハ此一元生々ノ氣ヲ受ケ先祖ヨリ子孫ニ傳ヘ生々スル者ナレハ滿身活潑唯生ヲ浴スルノミ既ニ生ヲ欲スレハ衣食居ノ利ヲ求メテ此生ヲ遂ケントスルハ必然ノ勢ナリ故ニ小兒カ生レバ直ニ乳ヲ呼吸ントス是求食ノ始ナリ寒ケレハ泣キ衣ヲ加フレハ止ム是求衣ノ始ナリ地ニ置キ泣キ抱ケハ止ム是求居ノ始ナリソレヨリ追々成長シ男女ノ情モ生シ富貴榮譽モ望ミ種々己レノ勝手便利ヲ求メテ競争スルハ唯生々ノ氣アレハナリ司馬遷ノ言ニ曰富貴人ノ情性所不學而俱欲也トハ此ヲ云ヒタルモノナリ」

▲辨 此段専ラ利ヲ論シテ義ヲ言ハサルモノハ、義者氣中之條理ノ謬見ヲ主トスレハナリ、但シ衣食居ノ利ヲ求メテ、富貴榮譽ヲ望ミ、種々己レノ勝手便利ヲ得テ、唯此生々ノ養ヲ遂ル歸宿結果ノ處カ、即義シヤト云意ナラン、果然ラハ利義合一ニテ義利合一テハナイ、是其利ヲ行フノ效驗ヲ認テ、義トスルモノニテ利カ先ニ立ツナリ、左スレハ心ノ徳ハ仁利禮智ニテ、仁義禮智テハナイ、勿論天ノ四徳ヲ元亨利貞ト云カラ、利ハ即義也ト云ハン乎、併シ孔子様カ利者義之和ナリト云テ、義者利之和也ト云ハズ、ヤハリ義カ本テ、利ハ末ナリ、此二字顛倒錯置ス可カラズ、余又遂ニ義利ノ根元ヲ辨セシ、即發端ニ云、人間ノ義利ハ、天上ノ理氣ニテ、天上ノ理カ、人間ノ心ニ入テ、義ト名前カ替リ、天上ノ氣カ人間ノ身體ト成テ、利ト名前ヲ改シナリ、故ニ人身ヲ養フニハ、衣食

居ノ利テナケレバ叶ハズ、人心ヲ養フニハ、義理テナケレハナラヌ、孟子ノ養大體爲大人、養小體爲小人、孔子ノ君子喻於義、小人喻於利、皆コノ理ナリ、人ノ身ハ一ツナレトモ、大體小體ノ別アリ、人ノ道一ツテモ、君子小人ノ別アリ、易ニモ陽爻ヲ大人トシ、陰爻ヲ小人トス、天地間陽陰ノ二物アルガ故ナリ、是ヲ視レハ、義利二ツモノデ、一ツニハナリ難シ、且又本末ヲ顛倒スルコトハ、決而ナラヌモノ也、事君ハ一事テモ、本末アリ、忠義ノ爲メニ事ルハ義ニテ、本ナリ、月給ノ爲メニ事ルハ利ニテ、末ナリ、苟モ衣食居ノ利ノ爲ニ事ルトナレバ、忠義ハ必ス末ニナル、月給ノ多少テ、忠義モ亦増減アルヘシ、萬事皆如此ソレデハ人道ガ立ヌ、陽明ハ何事テモ一ツニシタカル、兔角一偏ニナリテ、條理カ立ヌ、理氣合一知行合一、大學八條目モ、誠意ノ一目ニシタカル、致良知一ツテ事ガ足ルト云、一本ヲ知テ、萬殊ヲ知ラヌ者也、西洋ノ窮理ハ、萬殊ヲ知テ、一本ヲ知ラス、知萬殊、知一本、是聖人一貫ノ學也、馬遷ノ言モ亦一偏ニ屬ス、何トナレハ富ヲ欲スルハカリ人之情性テハナイ、道義ヲ欲スルハ第一人之情性ナリ、情性二字顛倒ス、蓋シ情ヲ主トシテ云ナリ、○且此欲生好利ノ心ハ自愛ノ心ニテ決シテ惡シキモノニ非ス孔子ノ言ニ仁者人也トテ人情カ直チニ仁ナリト云ハレタ孟子ノ仁人心也ト云モ同意ナリ又顔子ノ言ニ仁者自愛楊子ノ言ニ自愛仁之至也トモアリテ自愛ノ人情ハ己レ一身ニ向テノ仁ニア

ラズヤ唯自愛ニスキテ人ヲ損害スルニ至リテコソ惡トハナルナリ」

●且此欲生好利ノ心ハ、自愛ノ心ニテ、決シテ惡シキモノニ非ス、▲辨 是ハ心ニ善惡ノ二ツアルコトヲ知ラヌ申分ナリ、自愛又二ツアリ、善ト利トコレナリ、孟子曰、鷄鳴而起、孳々爲善者、舜之徒ナリ、鷄鳴而起、孳々爲利者蹠之徒也、欲知舜與蹠之分、無他利與善之間也ト、爲善モ慈愛心ヨリ出ツ、蹠ノ爲利モ亦慈愛心ナリ、孟子善與利ヲ對言スレハ、利即惡ナリ、豈決シテ惡シキモノニ非スト謂ヘケンヤ、其下孔孟顔子ノ言ヲ引テ之ヲ証ス、牽強附會ノ甚シキモノ也、且ツ三子ノ語、指ス所各異也、欲生好利ノ意、一點モナシ、余其異ナル所以ヲ辨セン、先ツ孔子ノ仁者人也ノ語ハ、身體ニ付テ仁ヲ云、人之身體ハヨク痛痒ヲ辨知シテ、木石ノ如キモノニ非ス、針ノ先キ刺シテモ痛ム、コレカ惻隱忍ヒサルノ仁シヤト云意ナリ、仁者ノ者ノ字、仁ヲ指ス、仁ト云モノハト云ナリ、顔子ノ云フ仁者トハ異ナリ、人ノ字人身ヲ指ス、是人ノ身體ニ就テ仁ヲ示サレシナリ、程子滿腔子惻隱之心ト同シ、孟子仁人心也ハ、心ニ就テ仁ヲ云、仁ハ本心ノ生理ナレトモ、俗人ガ博愛ダノナンノト、免角仕業ノコトニ思フ故、ソコテ孟子カ左様テハナイ、心ノ萬理ヲ具シタル處ガ仁シヤト云ナリ、心ハ萬理ノ本ナリ、惻隱モ、羞惡モ、辭讓是非モ、皆仁人ノ領分内ニ全ク備テアル也、俗人ハ事ノ上テ仁ヲ

求テ、心ニアルコトヲ知ラス、故曰放其心而不知求哀哉、又曰、學問之道無他、求其放心而已矣、ト左スレハ孔孟ノ言ハ仁ハ人ノ身心ノ生理ナルコトヲ明サレシニテ、未タ曾テ仁人情也ト云ハズ、人情ハ專ラ氣ニ屬ス、人情カ直チニ仁ナリト云ハレタナト、ハ、甚以杜撰ナル申分ナリ、元來性情二字ノ吟踈ナル故ナリ、性ハ理故ニ性善ト云、情ハ氣、氣ハ善惡アルモノナリ、又顔子ノ仁者自愛ハ、仁者ノ仁ヲ用ルヲ云、者ノ字人ヲ指ス、仁人ハ先ツ自身ヲ大切ニシテ、不義ヲ爲サス、身體ヲ傷ラス、コレ自愛ナリ、曾子ノ身體髮膚不敢毀モコレナリ、此楊子楊雄カ、楊朱ナラハ全ク爲我ノ說ナリ、夫レ仁ノ功用大ナリ、豈一身ヲ愛スルニ止ランヤ、博愛ハ業舜モ難シトス、若シ自愛仁之本也ト云ハ、可ナリ、然レドモ尙未タ盡サズ、有子曰、孝悌也者其爲仁之本與、仁ヲ爲スハ孝悌ヲ本トス、何ソ自愛ヲ以テ至レタリト爲サン、故曰道ヲ識ラサル者ノ言ナリ、若夫楊雄ナラハ、利祿ノ爲ニ王莽カ大夫トナリ、閤ヨリ投シテ死ス、即自愛ノ過キタルモノ也、カカル警言ヲ以、大聖大賢ノ言ト伍ヲナサシム、豈識者ト云ハンヤ、

●自愛ノ人情ハ、己一身ニ向テノ仁ニアラズヤ、▲辨 定メテ然ラン、顔ト楊トハ、大ニ異ナリ、●唯自愛ニスキテ、人ヲ損害スルニ至テコソ、惡トハナルナリ、▲辨 サレハコソ自愛ノ人情ハ、宛テニナラヌ、人情ハ氣ナリ、氣ハ變ル物ナレ



ハナリ、仁ハ理ナリ、唯恐ラクハ其是ラサルコトヲ、縦令過キタリトテ、人ヲ損害スルニ至ラズ、人ヲ損害スルハ仁ニアラズ、孔子曰、未見履仁而死者、又曰、苟志於仁矣、無惡ナリト、何ソ惡トナル道理アラシヤ、

○然ルニ此欲生好利ノ自愛心ハ己レ獨ナラズ天下人々ヨリ萬物ニ至ルマテ皆之アリ然レハ萬物ノ心モ我心モ同一ナリ萬物ノ心カ我一心ニ備リ居ルト云テ可ナリ孟子所謂萬物皆備於我トハ之ヲ云ナリ故ニ強恕而行求仁莫近焉ト云テ唯我欲生好利ノ自愛心ヲ人ニ推及シ利欲ヲ公共ニスレバ孔子所謂己所不欲勿施人ノ忠恕又左氏ノ所謂與人同欲モノニテ其極博愛トカ萬物一體トカ云大仁徳トハナル也

●然ルニ此欲生好利ノ自愛心ハ、己レ獨ナラス、天下人々ヨリ萬物ニ至ルマテ、皆之アル云々、▲辨ナル程、情カラ云ヘハ、人間萬物皆同一氣ナル故、皆同情也、徳カラ云ヘハ、人ニハ羞惡ノ心アリテ、義ノ爲メニハ生命ヲ塵埃ヨリモ輕ク捨ルコトアリ、此人ノ禽獸ト異ナル所以ナリ、禽獸ニハ羞惡ノ心有ルコトナシ、故ニ聖人萬物一體テモ、禽獸ニ向テ禮義ヲ説カズ、今萬物ノ心モ、我心モ同一ナリト云ハ、自カラ禽獸ニ陥リテ、人道ヲ牛馬ニスル也、夷狄ハ義理ヲ知ラス、故ニ禽獸夷狄トテ、同様ニ取扱フナリ、孟子所謂萬物皆備於我トハ、萬物ヲ取扱フ仁義ノ理カ、悉ク我ニ備ルト云コトナリ、萬物ノ心カ皆我心ニ備リテ居ルト云ニ非ス、若シ牛馬鶏

犬ノ心人間ニ備リタラハ、或ハ草ヲ喰ハントシ、或糞ヲ嗜マシ、左様ノ人決而無シ、但シ狼子野心ナト、テ、虎狼心アル人モ折折アレトモ、コレハ皆匪人ト云テ、人ノ性ヲ牴牾セルモノナリ、強恕而行、己所不欲勿施人ハ、皆仁ノ公共ヲ求ムルノ要方ニテ、欲生好利ノ自愛心ヲ推及スル方ニ非ス、利欲ハ到底公共ニスルコト叶ハヌモノ也、何トナレハ君子義ヲ利トシ、小人利ヲ利トス、公私ノ心自ラ異ナリ、豈能之ヲ公共ニスルヲ得ンヤ、上ヲ損スレハ下ノ利益トナリ、下ヲ損スレハ上ノ利益トナル、又豈之ヲ公共ニスルヲ得ン、故曰上下交征利而國危矣ト、苟モ義ヲ以テスレハ、上下大小各其分ニ止リ、各其利ヲ利トス、是ヲ之レ公共ノ利ト云、左氏所謂與人同欲、此等ヲ云ノミ、若シ利欲ヲ云ナラハ亦通シ難シ、萬物一體ノ大仁徳ハ、義ニ非レハ行ハレズ、故ニ君子ハ利ト言ハズシテ必ス義ト云、

○既ニ利欲ヲ公共ニスレハ自然ニ自他ノ分界出來己レ應分宜得ノ利欲ニ止リテ人ヲ損害セス所謂見得思義又所謂羞惡又ハ廉耻ナルモノニテ其極ハ天下ノ正路トモ云大義トハナルナリ此仁義ニ由リ利欲ヲ求ムレハ天下ニ誰一人咎ムルモノナク其利欲ヲ得ルコト洪大ニシテ又長久ナリ

●既ニ利欲ヲ公共ニスレハ、▲辨利欲ノ公共スヘカラサルハ己ニ辨セリ、●自然自他ノ分界出來、▲辨此理アルコトナシ、義ヲ先ニスレハ、自然ニ分界出來テ、己レ應分宜得ノ

利ニ止リテ、人ヲ損害セズト云へハ、語カ順ナリ、然ルヲ利欲ヲ公共ニスレハ、自他ノ分界ノ義カ出來テ、ソノ義カラ又利欲ニ止ルト云ハ、イカニ合一論テモ、更ニ條理カ立ヌ、根本ヲ知ラヌカラ也、前ニモ云フ如ク、義ト利トハ道心人心ニツヨリ出來テ、反對ノモノ也、故ニ胸中ニアリテ、毎ニ勝負ヲ相爲ス、道心勝テハ天理ニ循ヒ、人心勝テハ利欲ニ歸ス、其間髪ヲ容レス、其歸スル所利害相懸絶ス、周子曰、幾善惡トハ、此之謂也、所謂見得思義トハ、利ヲ得ルニ臨ンテハ、先ツ得ヘキカ、得ヘカラサルカノ義理ヲ善ク思案スヘシ、思案ナク唯利ニ貪着スレハ、必ス義ニ害アルモノソトノ御教訓ナリ、サスレハ利ト義トハ判然ニツニテ、合一ニハアラズ、且ツ義ニ當ラス利ハ受ク可カラスト云へハ、義ハ利ヨリ重キコト知ルヘシ、所謂羞惡廉耻ハ義ノ發見ナリ、故ニ正路トモ云、擴充スレハ大義トモナルナリ、大義豈利欲ヨリ出來ンヤ、●此仁義ニ由リ利欲ヲ求ムレハ云々、▲辨 此處却テ仁義ヲ先キニ出ス故、語順ナリ、然レトモ義ニ由リ利欲ヲ求ルハ、霸術ナリ、王道ニ非ス、董子曰、仁人者正其義(マ)而不謀其利、明其道而不計其功、コレ即王道、

○且此推及人ノ忠恕モ人々心ニナキコトヲ聖人カ焼付タルニ非ス己レガ生ヲ欲スレハ人ノ死スルヲ傷ミ己カ利ヲ好メハ人ノ不足ヲ氣ノ毒ニ思フハ自然ニアルモノナリ聖賢唯此心ヲ擴充シ天下人々生養ノ利ヲ圖ラントスルノミ其證ハ孟子七篇喋々

仁義ヲ論スレトモ其實際着手ニ至リテハ唯五畝之宅樹桑トカ鶏豚狗彘ヲ畜フトカ此民ヲシテ衣食居ノ利ヲ得セシムルニ過キスマタ韓退之カ原道ニ道德ヲ論スレハ仁義仁義ト囂稱スレトモ實地政事ヲ論スルニ及ヘハ仁義ノ字ハ生養ノ字ト變シ衣食居ノ世話ヲシテ鰥寡孤獨マテ養ヒアラシムルニ過キス唯此衣食用ノ一利ナリ己レ一人ニ私シスレハ人ヲ害スル迄ノ惡處ニ陥リ人ト公共ニスレハ天下ヲ利スルノ仁義トナリ唯手裏ヲ反ス許リニテ善惡ノ名ヲ變スルナリ由是觀之ハ匹夫匹婦ノ一身ヲ治ムルヨリ聖人ノ天下ヲ治ムルニ至ルマテ唯一利ヲ目的トセサルハナシ故ニ人間世界ハ此一利アルノミ利欲世界ト云テ可ナリ

●且此推己及人ノ忠恕モ云々焼付タルニ非ス、▲辨 固ヨリ然リ、

●己カ利ヲ好メハ云々▲辨 古ヨリ利ヲ好ム聖賢君子アラス、故ニ孔子モ富貴如浮雲ト云、孟子曰、焉有君子而可以貨取乎ト、利ヲ好ムハ小人ノ事ナリ、●聖賢唯此心ヲ擴充シ、▲辨 聖賢ハ唯物ヲ愛スルノ仁ヲ擴充シテ、仁政ヲ行フナリ、利欲ノ心ヲ擴充スルニ非ス、●孟子喋喋云々▲辨 コノ口氣テハ孟子毎ニ喋喋トシテ、口ニハ仁義ヲ説クカ、其實際着手ノ處ハ、ヤハリ衣食居ノ利ニ過キスト云ハンカ如シ、孟子説ク所ノ井田學校ノ政ハ、先聖王ノ仁義ノ政ナリ、仁政トハ心ノ仁ヨリ出ル政ヲ云、均ク之レ政也、心ノ仁ヨリ出レハ仁政ト

ナリ、利ヲ好ムノ心ヨリ出レハ利政トナル、當時諸侯富國強兵ノ邪説ニ煽惑セラレ、仁義ヲ迂闊トシ、征利ノ政ヲ行フ故、孟子見ルニ忍ヒス、懇々ト其害ヲ排斥シ、時君ニ仁政ヲ行フコトヲ觀勉スル也、孟子曰、夫仁政必自經界始、經界不正、井地不均、穀祿不平、是故暴君汚吏、必慢其經界云々、集註此法不修、田無定分、而豪強得以兼井、故井地不均、賦無定法、而貪暴得以多取、故穀祿有不平、此欲仁政者之所以從此始、而暴君汚吏、則必欲慢而廢之也ト、夫井田ノ仁政ハ、十ガ一ノ税ナレハ、民ニ益アリテ其君ニ利アラズ、故ニ暴君汚吏ハ之ヲ廢スルナリ、先王ノ民ハ三年耕シテ一年ノ食ヲ餘シ、九年耕シテ三年ノ儲餘アリ、水旱凶饑アリトモ、曾テ凍餒セサルナリ、當時ノ時勢ヲ察スルニ、刑罰繁苛、税斂無度、故ニ一饑歲ニ遇ハ、民多ク流亡ス、孟子魯ノ穆公ニ對テ曰、凶年饑歲、君之民老弱轉乎溝壑、莊者散而之四方者矣、千人矣、而君之倉廩實、府庫充、有司莫以告、是上慢而殘下也、是其利政ノ害實証ナリ、故ニ利政ヲ行ヘハ、上富而下困窮離散ス、苛政虎ヨリ猛ナリ、眞ニ畏ル可キコトナリ、因テ余モ亦喋々辨ス、韓退之原道ノ意孟子ト同シ、●己一人ニ私スレハ云々、▲辨 己一人ニ私スルハ利心ナリ、故ニ惡處ニ至ル、公共ニスルハ仁義ナリ、故ニ天下ヲ利ス、其本已ニ異ナリ、善惡ノ名ヲ變スル也、●由此觀之ハ云々、▲辨 唯此一利ヲ目的トスル聖人、何レノ書何レノ邦ニアルヤ、余

ガ知ラサル所ナリ、且一利ヲ目的トスレハ匹夫匹婦ト同様ニテ、何ソ聖人トスルニ足ランヤ、余カ所謂聖人トハ、伏儀神農ヨリ文武周孔ニ至ルノ聖人ヲ云、皆仁義禮智信ノ五常ヲ具備シテ、能ク知リ行フ人ナリ、利欲ノ氣一毫モナシ、此等聖人ヲ以テ、一利ヲ目的トスルト云ハ、聖人ヲ誣ルモノ也、

○然ルニ其利中ニ自然備リタル條理ノ仁義ニ由ラサレハ眞正ノ利ヲ得テ此生ヲ遂ル能ハス獨天ノ一元氣モ元亨利貞ノ條理ニ由ラサレハ萬物ヲ育成スル能ハサルカ如シ故ニ天ノ元亨利貞ハ元氣中ノ條理ニテ理氣合一相離レス人ノ仁義ハ利欲中ノ條理ニテ義利合一相離レス天人同一理ト謂可シ【是マデ仁義ノ二字ニ舉レタレトモ義ハ仁ヲ行テ宜シキノ名ニテ仁ハ既ニ含蓄スレハ本題ニ從ヒ以下ハ唯義一字ヲ舉グ】●然ルニ其利中ニ自然備リタル云々、▲辨 利ト義ト已ニ異ナリ、利欲中豈仁義アラシヤ、●故ニ天ノ元亨利貞ハ、元氣中ノ條理ニテ、▲辨 元氣中自然ノ條理ニテト云ヘシ、理ト氣ト二ツガ、合一ニナリテ相離レズト云ハ、如何ニモ御尤ノ論ナリ、元來一ツモノナレハ、相離レズハ贅語ナリ、此處氣ヲ以理ヲ統ヘ、利欲ヲ以テ仁義ヲ統フ、謬妄殊ニ甚シ、●細註義ハ仁ヲ行テ宜キノ名ニテ、仁ハ既ニ含蓄スレハ云々、▲辨 此レ義外ノ説ニテ、原道ヲ襲フタモノナリ、仁義禮智、即天ノ元亨利貞ニテ、人心ノ徳ナリ、故ニ天人同一理ト云、豈義獨リ外ニアランヤ、仁モ亦外テ云フコトモアリ、仁政ナドハ、政事

ノ上テ仁ヲ云ナリ、禮モ心ノ理ナレトモ、多ク三百三千ノ禮式ヲ指テ云、勿論偏言專言ト云コトアリテ、仁專言スレハ義禮智信ヲ兼ヌルモノナリ、仁義ノ二字ヲ連用スレハ、仁ハ自ラ仁、義ハ自ラ義ニテ、體用内外ニアラス、

○因テ之ヲ古經書ニ徵スルニ此義利關係ノ義ヲ能書シタルハ周易ニ若ハナシ夫レ易ハ神道設教トテ聖人カト筮ヲ借りテ人ニ避害就利ノコトヲ教ヘタル書ニテ吉凶トアルハ皆利害ノ事ナリ又利有所往不利涉大川ナト、卦ニ爻ニ利害ヲ説カザルコトナクシテ其利害ハ皆卦爻中德義ノ得失ヨリ生シ義利合一相離レス其主旨ヲ一言ニテ能ク蔽ヒタル文言繫辭中ニ二語アリ其一ハ文言傳曰利者義之和也ト和ハ發中節トテ、我心ニテ衣食居ヲ得ルニ如何シタレハ宜シト裁制シタル義カ衣食居ノ上ニ發シ程合ノ節ニ中リ衣食居ト相戻ラズ其利ヲ得ルヲ云ナリ猶利ハ義ノ結果ト云如シ故ニ必ス利ヲ得ベキモノナリ利ヲ得サルノ義ハ眞義ニアラス又義ニ由ラサルノ利ハ私利浮利ニテ眞利ニアラサルナリ晏子所謂義者利之本也モ亦之ヲ言タルナリ其一ハ繫辭傳曰精義入神以致用利用安身以崇徳ト言ハ心ニテ義ヲ精フスルコト神妙ニ入レハ外ニ發シテ衣食居ノ實用ヲ致ス衣食居ノ實用カ便利ニナリ一身ヲ保安スレハ益ス益ス心ノ徳義カ崇クナルト云コトニテ内外義利合一ヲ説キタルナリ陽明カ知行合一ヲ説キテ知者行之始行者知之終ト云タルト同口氣ナリ故ニ余ハ義利合一ヲ説キテ義ハ利ノ始利ハ義ノ終ト云

ハントス」

●因テ之ヲ古經書ニ徵スルニ云々、周易ニ若ハナシ、▲辨 易ノ利不利ヲ言フハ、此論ノ利欲ニ關係ナシ、黄裳元吉ト云テモ、衣服ノコトニアラス、需者飲食之道ト云テモ、飲食ハカリノコトニ非ス、棟撓ムト云テモ、家ノ破壊シタルコトテモナイ、何必ス衣食居ノミニ關センヤ、●義利合一相離レス、▲辨 不然、周易ニ利不利ヲ言アルハ、宜シ宜シカラズト云コトナリ、皆卦爻ノ得失ニ因テ、事上ニ就テ云コトニテ、此事ハ如此スレハ宜シ、如此スレハ宜シカラズト云コトナリ、利欲ノ利ニ非ス、此論ハ元來利欲ヲ目トスル説ナレハ、義ト利欲ト合一相離レスノ徵トス可カラズ、●其旨ヲ一言ニテ能ク蔽ヒタルハ、文言繫辭中ニ二語アリ云々、▲辨 コレ迄ハ仁義ハ利欲中ノ條理ト説テ、利欲カ檀那デ、仁義ハソノ家來ノ様ニ説キタルカ、此處忽變シテ、利害ハ徳義ノ得失ヨリ生シタルノ、又我心ニテ衣食居ヲ得ルニ、如何シタレハ宜キト裁制シタル義カ、衣食居ノ上ニ發シ、ナト、義ヲ先キニ出テ、利ヲ後ニスルハ、文言ヲ引キタル故ナリ、左様ナクテハ叶フマシ、サテ文言ノ利者義之和也トハ、天人ノ理ヲ合セ論シテ、人テ云ヘハ、心ノ義ガ發シテ、滯リナクスラスラトユク處、即君ニ事テ忠、親ニ事テ孝、萬事ヲ處置シテ其宜シキヲ得サルナキヲ云、コレ義ト物ト相和合スルヲ云ナリ、利物トハ物其宜キヲ得ルヲ云、此論ノ利ハ衣食居ノ利ヲ得サル

ヲ云、故ニ云猶利ハ義ノ結果ニテ必利ヲ得可キモノナリ、利ヲ得サルノ義ハ眞義ニアラスト、蓋シ義ヲ行フテ衣食居ノ利徳ヲ得サルハ眞義テハナイト云ナリ、サレハ利ハ衣食居ノ方ニアリ、故ニ得サルノト云、義ト判然ニツモノ也、文言ノ意ニ非ス、利ヲ得サルノ義ハ眞義ニ非スト云テモ、本來カラ云ヘハ義ヲ行ヘハ利益ヲ得ル筈ノコトナリ、學者カ學問スルハ義ナリ、學問成就スレハ、必ス爵祿ヲ得ルハ利ナリ、左レトモ顔閔ハ終身爵祿ヲ得ス、時ニ遇ハサレハナリ、又農夫ガ力耕スレハ一粒萬倍ノ益ヲ得ルハ利ナリ、サレトモ饑歲ニ遇ヘハ一粒モ取レス、義ト利益トハ本ニツモノナレハ也、義ハ利ノ結果、利ヲ得サルノ義ハ眞義ニ非ト云可ラス、且ツ義ハ利ノ結果テハ、利カ先キニナリテ、又文言ノ意ニアラス、管晏ハ功利家ナレハ、其言モ亦利ヲ主トシテ云タルナルヘシ、●其一ハ繫辭傳ニ云々、▲辨 繫辭傳ノ解、王弼カ、孔穎達カ知ラ子トモ、扱々卑陋ノ説ナリ、余カ聞ク處ハコレニ異リ、此一節屈伸ノ理ヲ説テ、學問ノコトヲ云ハレタル也、故曰尺蠖之屈、以求信也、龍蛇之蟄、以存其身也、精義入神云々ト、是レ上ノ二句ヲ承テ云、平生學問ヲシテ精義入神ハ屈伸レトモ、義理カ精クナレハ事ヲ行フニ臨ンテスラスラク、是レ伸ナリ、精義入神ハ内ナリ、利用安心ハ外ナリ、内ニ義理ヲ蓄ハイ置ケハ、何事ニ臨ンテモ、差支ハナイト云コト、利用ノ用ハ身ノ働ラキヲ云、孝悌忠信ノ類、衣食居ノ實用ヲ

指サスニアラス、利用トサイ云ハ、ハヤ衣食居ノコトト思フハ、功利家卑陋家ノ見ト云ヘシ、利用トハ身ノ行ノ敏ニナルコトナリ、衣食居ニ關係ハナシ、凡聖賢ノ學ト云ハ、道義ノ學ヲ云、道義ヲ修ムレハ、衣食居ハ其中ニアリ、董子所謂不謀其利不計其功是ナリ、義ハ利ノ始、利ハ義ノ終ト云ハ、終ノ利ヲ目的トスル也、故曰卑陋ノ見ト、陽明カ知行合一ハ、大學ノ格物致知ト誠意トヲ混合シ、致良知ノ私説ヲ建立シタルモノニテ、聖經ノ本意ニ非ス、羅整庵曰、自有大學、未有此解ト、眞ニ謬妄ノ説ト云ヘシ、

○又詩經ニ徵スルニ三百篇中男女ノ情ト亂離ヲ憂フル詩ヲ除クノ外ハ多ク君子ノ福祿ヲ祈レリ樂只君子福履綏之君子萬年福祿宜之樂只君子福祿申之ナト、枚舉ニ暇アラヌ君子守義ノ人ナリ故ニ福祿ノ利ヲ受クベシト云ナリ書經ニ徵スルニ夏桀殷紂カ德義ヲ修メシテ天命ヲ失ヒ殷湯周武カ德義ヲ修メテ天命ヲ得タル事ヲ陸續記載シ德義ヲ修メテ福祿ノ天命ヲ求メシムルノ訓戒多シ其中洪範ニ建其極斂其五福トアリテ有極ヲ蔡傳ニ義理之至極ト解スレハ即義ノコトナリ五福カアレハ歸宿ノ目的ニアラス唯道表ノ如キノミ義ヲ道表ニシテ五福ノ目的ヲ斂ムルナリ故ニ余ハ義ハ道ノ道表利ノ歸宿ト云ハントスルナリ

●又詩經ニ徵スルニ云々、多ク君子ノ福ヲ祈レリ、▲辨 コレハ詩人ヨリ君子ノ福祿ヲ頌禱スルナリ、君子自ラ福祿ヲ祈



ルニ非ス、又詩中ニ自求多福ナトノ語モアレトモ、君子ノ爲ス所、皆天理ニ叶フ故、天命ノ福祿壽命ヲ受クヘキ道理アルニ因リ、カク云ナリ、孔子曰、仁者壽、孟子曰、仁則榮、不仁則辱、禮記曰、積善之家有餘慶、積不善之家有餘殃、ナレトモ皆此道理アルコトヲ云、併シ同シ天命テモ、道義ト福祿トハ、出處カ異ナリ、道義ハ太極ノ理ヨリ出ツ、福祿ハ陰陽ノ氣ヨリ出ツ、故ニ相應セスコトアリ、顔淵ノ不幸短命、盜跖ノ不義福壽ノ類コレナリ、故ニ君子ハ道義ヲ修メテ、福祿ハ宛テニセス、楚書曰、楚國無以爲寶、唯善以爲寶、舅犯曰、亡人無以爲寶、仁親以爲寶、ミナ道義ヲ以テ寶トスルナリ、晉楚ハ富強ノ大國ニテ、利ノ大ナル者ナリ、而シテ善ト仁親トニ換ル能ハス、古人義ヲ重ンシテ、利ヲ輕ンスル知ルヘシ、若シ壽榮餘慶ヲ求ンガ爲ニ、仁ヲ行ヒ善ヲ積ムトナラバ、コレ賽錢ヲ多ク擲チ、多福ヲ買ントスル小人ト同シ、仁人君子何ソ如此愚ナランヤ、秦皇漢武ハ、人欲ヲ極メンカ爲ニ延年ノ術ヲ修ム、サレトモ其爲ス所ハ、天命ノ義ニ循ハズ、故ニ其效ヲ得ス、是亦理ノ當然ナリ、洪範ノ五福六極モ、皆此道理ニテ、道義ヲ修ムルト、修メサルトノ效ヲ云ナリ、五福ノ天命ヲ目的ニシテ、有極ノ義理ヲ修ムルニ非ズ、五福ヲ目的ニシテ義理ヲ修ルハ、即賽錢ヲ費シテ多福ヲ買ントスル小人ノ心ト同シ、豈大聖箕子ノ心ト謂ンヤ、是レ人心道心毫釐千里ノ差アル所、學者ノ最モ能ク辨知ス可キ所ナ

リ、有極ヲ蔡氏カ義理之至極ト解セシハ、至當ノ解ナリ、サスカニ朱子ノ門人ホドアル、五福ヲ目的トシテ有極ヲ道標トスル解トハ、同日ノ談ニ非ス、カ様ニ聖經ヲ多ク羅織シテ、天命ノ義ヲ道標トシ、人欲ノ利ヲ歸宿トスルハ、又何ノ心ゾヤ、

○大學ニモ有徳此有財トアリ中庸ニモ大徳必得其祿トアリ論語ニハ不義而富且貴於我如浮雲トアリテ孔子ハ不義ノ利コソ卑シメラルレトモ邦有道貧且賤焉耻也トアリテ義ニ由ルノ利ヲ得サルヲ耻辱トセラレ又子張カ問干祿ハ言行ヲ慎メハ祿在其中ト干祿ノ道ヲ教ヘテ干祿ハ惡シキトハ決シテ申サレス孟子ニモ君子居是國也、其君用之、則安富尊榮トアリテ徳義アル君子ヲ用ユレハ安富尊榮ノ利ヲ得ルト云フ此外諸經傳ヲ偏閱スルニ利ヲ以テ人間ノ極度歸宿トナサ、ルハナシ」

●大學ニモ有徳此有財トアリテ、中庸ニモ云々、▲辨 サテ此學庸論孟ノ語ニ據レハ、徳義ト財用ト、分明ニ之レニ物ナリ、合一ノモノニ非ス、合一論モコ、ニ至リ自ラ破綻セリ、大學ノ有財、中庸ノ必得其祿、論語ノ富貴貧賤、子張ノ干祿、孟子ノ安富尊榮、皆外ニアルモノナリ、徳義ハ身中ニ存スルモノ、更ニ關涉ナシ、サレハコソ孔子モ如浮雲ト云ヒ、又邦無道富且貴耻也ト云、若シ徳義富貴合一ニテ、離レヌモノナラハ、有道ノ世テモ、無道ノ世テモ、徳義アル孔孟ノ如キ者ハ、必ス富貴ナルベシ、耻ニハナラス、然ルニ孔孟一生

貧賤ナルハ何ソヤ、富貴ハ外物ニテ、徳義ニ關涉ナキモノナレハナリ、此レ初ヨリ二物ニテ、合一ナラサルノ明徴ナリ、サラハ學庸ノ有徳此有財、大徳必得其祿ハ、如何トナラハ、前ニモ云如ク道理カラ云コトナリ、道理ヨリ云ヘハ、此兩物大ニ關涉アリ、此處精細ニ分析セネバナラヌ、道理ハ一定ノモノニテ、千萬世變セヌモノナレトモ、陰陽ノ氣運ハ、盛衰昏明清濁アリテ、兎角一定ナラズ、變動スルモノ也、故ニ氣運ノ盛明ナル時ハ、道理顯ハレ氣運ノ衰昏ナル世ハ、道理隱ル、人間一身ニテモ同様、氣質清明ノ人ハ、道理著明ニテ君子トナリ、氣質昏濁ナル者ハ、道理モ亦昏闇ニナリテ小人トナル、故ニ性善カラ云ヘハ一様ナレトモ、氣ニハ昏明強弱ノ異ナル有リ、理ハ一定ノモノ、氣ハ萬變ノモノナレハナリ、然ルニ道理ハ貴キモノ故、有道ノ君子ハ富貴ヲ得ヘク、無道ノ小人ハ貧賤ヲ得ベキハ理ノ正ナリ、君子ニシテ貧賤、小人ニシテ富貴ナルハ、氣ノ變ナリ、故ニ小人ノ富貴ヲ得ルヲ僥倖ト云、其正ニ非サレハナリ、是ヲ以テ一定不變ノ理ヲ守リテ、萬變不同ノ氣ニ關係セズ、若シ二者相克ツノ際ニ至レハ、必ス理ヲ助ケテ氣ヲ抑ヘ、陽ヲ扶ケテ陰ヲ懲ラス、諸經傳聖賢ノ旨皆斯ノ如シ、況ヤ敢テ利ヲ以テ人間ノ極度歸宿トセンヤ、謬妄モ亦甚シ矣、」

○然ルヲ宋儒利ヲ好ムハ小人利ヲ不好ガ君子ト云ハ人情ニ違背シ孔孟人情ニ原クノ學ニアラス故ニ荀子曰好利惡害是君子小

人之所同也若其所以求之道則異也トハ義ト不義トヲ云ノミ韓非子ニモ人莫不欲富貴全壽而未有能免於貧賤死夭之禍者失其路而妄行也ト路ハ即義ニテ善ク聖人ノ旨ヲ得タリ然ラハ古聖賢ノ學ハ唯由義而求利ニ在リ片時モ義利合一相離レザルコト明確ナリ然ルニ此ニ困リタル一言アリ陽虎曰爲仁則不富爲富則不仁トアツテ利ト仁義トハ反對ノ如ク見ヘ是迄喋々論シ來リシ義利合一論モ破ル、ガ如クナレトモ其實決シテ然ラス陽虎カ所謂富ハ一己ノ私利ニテ我所謂公共長久ナル眞利ニアラス大學ニ所謂貨悖而入者亦悖而出又孟子ニ所謂不仁者安其危而利其菑スルモノナルガ故ニ陽虎カ富モ果シテ遠カラス之ヲ失ヘリ然レハ陽虎カ仁富反對ノ言ハ全ク目前ノ小算盤ノ見ニテ詰リ眞義眞利ノ合一ニ歸スルコト益明確ナリ然レトモ之ヲ行フニ至リテハ先後ノ序輕重ノ權衡ヲ知ラサレハ、又之ヲ合一ニスルコト能ハス」

●然ルヲ宋儒云々、孔孟人情ニ原クノ學ニ非ス▲辨 孔孟ノ學天理ニ原クモノ也、何ソ人情ニ原カンヤ、余其一証ヲ擧ン、餘ハ類推スベシ、孔子曰、富與貴是人ノ所欲也コレ人情ヲ云、不以其道得之不處也、コレ道ヲ云、貧與賤是人ノ所惡也、コレ人情ヲ云、不以其道得之不去也、コレ道ヲ云、孟子曰、生亦我所欲也、義亦我所欲也、コレ人情ト義トヲ併セ云、二者不可得兼、舍生取義者也、コレ專ラ義ヲ云、孔孟人情ト道義トヲ兼子云トキハ、必ス道義ヲ取テ、人情ヲ舍ツ豈

天理ニ原クノ學ニ非ズヤ、道義即天理ナリ、獨リ孔孟ノミ然ルニ非ス、周易モ亦然、元亨利貞ニ合スルヲ、君子ノ道トシ、吉道トス、元亨利貞ニ合セサルヲ小人ノ道トシ、凶トス、聖賢ノ道皆斯ノ如シ、宋儒ハ孔孟嫡傳ノ道學者也、故ニ利ヲ好ムハ小人、利ヲ不好カ君子ト云、孔子曰、君子喻於義、小人喻於利ト、君子義ヲ好ム故ニ義ヲ喻リ、小人利ヲ好ム故ニ利ヲ喻ルナリ、歷世ヲ通觀スルニ義ヲ好ザルノ君子ナク、又利ヲ好サルノ小人ナケレバ、孔孟程朱ノ言、眞ニ誣ユ可ラサル也、

●荀子曰云々、▲辨 荀子此言、能ク孔孟ノ旨ヲ得タリ、韓非子ハ刑名學者ナレハ、其言ハ是ニ似タレトモ其意ハ如何ヲ知ラズ、失其路ノ路ノ字、孟子ト同シキヤ否、又未知ル可カラサルナリ、

●然ラハ聖賢ノ學ハ云々、▲辨 韓非子ハイザ知ラス、孔孟ノ言彼カ如シ、未嘗テ由義而求利ノ語アラズ、豈明確ト云ハンヤ、

●然ルニ此ニ困リタル一言アリ云々、▲辨 陽虎カ存意ハ富ニアレトモ、其言ハ則是ナリ、人ヲ以テ言ヲ廢ス可カラズ、利ト仁義トハ反對ノモノナリ、故ニ孟子モ毎ニ對言ス、其辨前二具ス、義理合一論ハ、既ニ自ラ之ヲ破ル、何ソ陽虎カ言ヲ待シヤ、陽虎カ所謂富ハ、即合一論ノ利ニテ、公共ナルモノニ非ス、大學孟子ノ言ハ、義ト利トヲ彼此算用シテ、附會

合一スルモノ、針砭ナリ、何程大算盤ヲ算用シテ、義ト利トヲ先カラ云テモ、後カラ云テモ、到底算用ハ立ス、ソレハソノ筈、元ト天理ト人欲トノ分界アレハナリ、合一ニナル氣ツカイナキコト益明確ナリ、因テ云、孟子齊王ガ好色好貨ノ情ニ就テ、與百姓同之、於王何有、ト云ハレタハ、人欲ヲ轉化シテ、天理ニ歸セシムル名手段ニテ、古今ノ妙論ト云ベシ、孟子大賢ニ非レハ、孰カ能ク如此ナラン、朱子論シテ曰、此篇自首章至此、大意皆同、蓋鐘鼓苑囿遊觀之樂、與夫好勇好貨好色之心、皆天理之所有、而人情之所不能無者、然天理人欲、同行異情、循理而公於天下者、聖賢之所以盡其性也、縱欲而私於一己者、衆人之所以滅其天也、二者之間、不能以髮、而其是非得失之歸、相去遠矣、故孟子因時君之間、而剖析於幾微之際、皆所以遏人欲而存天理、其法似疏而實密、其事似易而實難、學者以身體之、則有以識其非曲學阿世之言、而知所以克己復禮之端矣、辨者曰、朱子此論、剖析精微、孟子ト體ヲ同クスルニ非レハ、何ソ能ク此ニ及ハンヤ、此合一論ノ如キハ、天理モ人欲モ、義理モ人情モ、更ニ無差別ニテ、只管ニ義理ヲ合一ニセントスル故自ラ齟齬ヲ生シ何ボト彌縫シテモ、合一ニナラス其苦心思フヘシ、且夫孟子ハ人欲ヲ化シテ天理トナサントス、合一論ハ天理ヲ滅シテ人欲世界ト成ントス、何ソ其人情ニ違背スルノ甚シキ也、

明治廿九年丙申十一月廿九日 宇井太三郎 印